



平和は今、あなたたち一人ひとりの「心」にある

六月二十六日(月)、野市小学校では、全校児童五百八十八人が体育館に集まり平和集会を行いました。修学旅行で広島へ行き、平和学習を終えた六年生が発表をしました。時久校長先生は「私の赤やんが生まれたとき自然と涙がこぼれた。皆さん一人ひとりが家族が待ちのぞんで生まれてきたのですよ」と話されました。

そして、各クラスが作った平和の短冊が紹介され、選ばれた短冊はみんなで折った千羽鶴に飾られました。原爆被災地で学んできた六年生が、「語り部」植田のり子さんの十四歳の時の被爆体験をスライドを使った朗読劇で発表しました。植田さんは爆心地から一・五キロメートルの場所で被爆しました。音はなく、ピカッと

明るいオレンジや紫色の光が見えたそうです。原爆というのはたくさんの方の命を消したひどいむごい、というものでなく「悪魔」だと教えてくださりました。「私たちは、植田さんの話を聞いて戦争の怖ろしさを知りました」と学んで来たことを在校生に伝えました。最後に世界のみんなが仲良く暮らせるように願いながら「折り鶴」を合唱しました。



あなたは何に「平和」を感じますか？日本が終戦を迎えてから、六十一回目の夏が訪れます。しかし、戦争は今も世界のどこかで、現実起こっています。改めて「平和」を考えてみてください。忙しい日常に押し流されて向かい合うことの大事さを忘れてはいませんか？戦争も平和も創るのは人間です。ふり返ることを忘れないでください。今の平和の根底には、かつて戦争の犠牲となった多くの人たちの願いがあるのですから……



濱口 長汀さん (79歳) 夜須町手結山

19歳の時、学徒動員で伊丹の大阪機械工場で高射砲弾の製造に従事。「工場に向かう汽車の中で土佐女子の学生からもらった、おにぎりの味が忘れられない」と当時をしのびます。



昭和二十年八月十五日に昭和天皇の玉音放送を横須賀で聞いた。海軍対潜学校で機雷を抱く練習をしていた折の終戦だった。

旧制中学校五年間のうち、三年生(十五歳)になるとみんな鉄砲を持たされた。卒業後は兵学校や商船学校に進んだ。これが当時、普通だった。

死んだら国や親からもよるこんでもらえる至誠観という教育を受けた。自分もそれが正しいと感じたし、進んで兵役に就いた。また自分の家は、兄弟三人が戦争に行き、父親は軍籍にあつたため「誉れの家」と称えられた。

しかし、ラジオから聞こえる終戦の言葉に思ったことは「家に帰れる」といつかだけで、翌日には裸一貫で良いので早く帰りたいと思った。東京は焼

け野原で駅からはぼっこり宮城までが見渡せた。それを横目に、満員の下り列車に飛び乗って高知へと急いだ。

変わり果てた住吉海岸

八月下旬に帰りついた自宅には、二階にまだたたくさんの予科練の兵隊が間借りをして

予科練兵は旧制中学校三年の少年たちで、飛行機の操縦をするために連れてこられていた。しかし、終戦に近づくと、乗る飛行機がないため、『震洋艇』を隠す豪を掘ったりと肉体労働にかり出されていた。自宅の庭は『烹炊所』となり、常時二十人の予科練兵が飯炊きをしてた。そのため自分ら

家人は店の離れの小さな一室で生活を余儀なくされていた。住み慣れた景色も一変し、震洋隊の爆発事故で、住吉海岸の松原にあつたひと抱えほどの松も、見るも無惨な姿になっており、潜ればなにかがすぐ探れた磯も、すべて焼け焦げていた。

とら年の千人力

兵隊に腹帯として渡す『千人針』には、女性が赤糸で一针ずつ縫って千個の縫い玉を

つくり、男性が『千人力』の念力を頼みとして『力』の文字を書いた。とら年生まれの人には特別に、歳の数のうちなら好きなだけ『力』の文字を書けたので、とら年生まれの自分とはとても喜ばれた。『虎は千里を行って千里を帰ると勢い盛んなたとえとされ、武運を祈って、帯にも虎の絵が描かれることが多かった。』

両親からの愛情

その腹帯を自分ももらつて出征するときには皆が見送ってくれ、父親は岡山まで来てくれた。父は何度か広島にも面会に行っていたようだった。当時の交通事情を思うとその行動力に敬服する。

戦争を経験して

今の若者には信念を持つて生きて欲しいということ。人として人生の中でどうしてもやらなくてはならないことがあると思う。他人から見たら絶対反対されそうなことでも、日常の中のひと仕事であろうとも、お金にならなくても信念を持つことの大切さを貫いて欲しい。それが生きている証だから。

手結海水浴場。(昭和12~13年ごろ)「夜須 今昔写真集」より